

近況報告

「学び舎からの巣立ち—現在まで—」

別府大学 大学院文学研究科博士前期課程修了生

佐藤 紘 一

四月から鳥取県立図書館郷土資料室の学芸員に採用される事になったこの機会に、大学院修了以後のこれまでの職歴を、勤務施設等の業務と併せて紹介したい。この間、大学院、そして院生研究報告会を巣立って、今春で丸九年を迎える。

私は、平成十九年（二〇〇七）三月に文学研究科博士前期課程を修了した。在学当時、歴史学（日本史）を専攻した私の指導教官は、実に半世紀近くの長きに亘って別府大学で教鞭を執られ、平成二四年秋に瑞宝中綬章を授与された後藤重己教授であった。そして、修士論文で副査を担当頂いた針谷武志教授を始め、中世史の田村憲美教授、白峰旬教授、近現代史の末廣利人教授の先生方から指導を頂いた。院生研究報告会では、西洋史、東洋史の先生方からもご指摘やご助言を頂いた。

近世村落史における大庄屋制をテーマに定め修士論文の執筆を進めていたが、その作成もままならない内に二度目の修了年度も後半を迎え、私は専門職に拘らず一般企業への就職活動も視野に入れた。結果として、IPMやガス燻蒸を取り扱う文化財保護業という今まで関わったことの無い分野に歩みを進めることとなった。そ

の為、就職してからは文化財加害虫や使用する薬剤の化学的な知識を一から勉強する事となり、職業人としてはまさにゼロからのスタートを切る事となった。

携わった仕事の内容は、博物館、美術館、資料館、図書館、文書館など資料を展示・収蔵する施設を中心に、現場での薬剤燻蒸による虫菌害防除作業や資料、作品にとって有害となる生物が生息していないかなどの確認をするモニタリング作業であり、これに係る営業と事務の業務も行った。

就職してからは業界で必要とされる資格を取得し、現場の責任者などを任せられ、仕事へのやりがいを感じていたが、多くの現場を実見するにつれて「保存環境」を整える事が優先されるべきとの思いが強くなるに至った。九州の業界で主流であった薬剤燻蒸などの薬剤による措置を第一に考える手法に疑問を抱き、自分自身が現場で実践する機会を得たい、と改めて専門職への挑戦を考える契機となった。

その折、経済対策の一環として緊急雇用での嘱託職員募集が行われていた佐賀県立図書館で郷土調査担当の職を得る事となった。平成二十三年四月からの一年間のことである。

業務として、受入資料の目録作成や資料調査、調査報告の寄稿、資料の整備（管理ラベルの貼付など）、蔵書点検など在学习時に経験をしなかった作業を行う機会を得るとともに、九州国立博物館でのIPM（総合的有害生物管理）研修や古文書修復講座への参加の機会を得た。文化財保護業で培った技能と、この研修で得た知識を活

かし、図書館職員有志による館内IPMへの取り組みを実施出来た事は予想しなかった好事であった。この館内IPMの取り組みを九州国立博物館において事例報告を行う機会を得たが、これは自身としても大変貴重な経験となった。報告などは殆んど経験していなかった私には、院生研究報告会での数少ない報告経験は大きな意味があったと思われる。

平成二十四年四月からは小城市立歴史資料館・同中林梧竹記念館学芸員（嘱託）に任用され、間もなく丸四年を迎えるが、この間には、資料収集、調査研究、展示に加え、同館発行の「調査研究報告書」に小論を寄せ、市のアーカイブズに係る業務にも関わった。他に、資料集の編集、地域の大学との連携事業、郷土史研究会といった団体に関わり、古文書解読のボランティアもスタートさせることが出来た。また、「保存環境」の整備も少しずつだが進める事が出来た。この九年間は、幾つかの研修や研究会に参加し、多くの人脈を得た。そして、専門的なところでは出会った皆さんに助けられる事も多かった。振り返ってみると、大学院で出会った先輩や同輩にも刺激と協力を得てきた様に思う。

この「ゆけむり史学」への寄稿も、先年十一月に大分で開催した研究会に同席した院生研究報告会創始メンバーの一人である内田鉄平氏の声掛けを頂いたからである。

末語ながら、本誌を発行する院生研究報告会が、これからも大学院生の学究精神の醸成と経験の場となる事を心より願い結びとしたい。